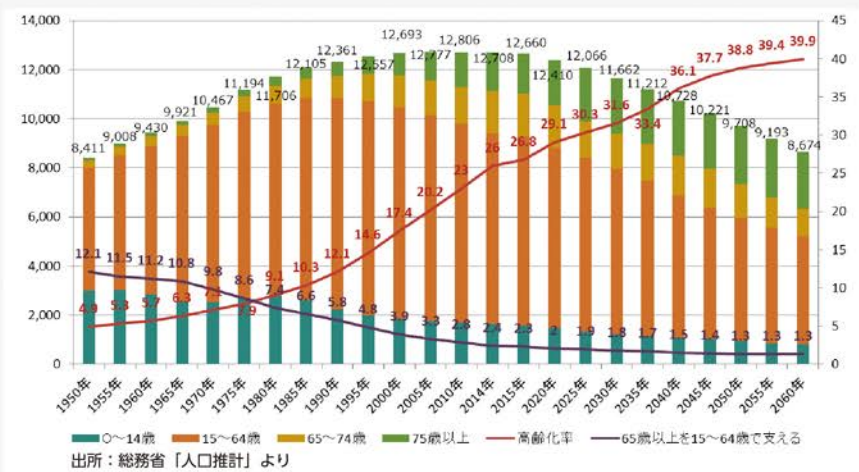


壊れゆく“若者たち”

『File.40 デジタル症候群～デジタル遺品』

文 石井 通明 text by Michiaki Ishii



「デジタル遺品」という言葉をご存知でしょうか。最近では高齢の方もパソコンやスマホを利用しています。この高齢の方々がインターネットを利用して、買い物をするだけではなく、SNSへの登録、ネット銀行の利用、ネット証券の利用等々、自分しか知らない資産をネット上に置いているケースも大変多いのが実状です。実際こうした高齢者が病気や不慮の事故で亡くなった際に困るのは、残された家族です。銀行口座も証券口座もネット上に複数持

てる時代、管理しているのは主に個人であり、配偶者に全て共有されておらず、パスワードが分からないために対処が出来なくなるケースがあります。例えば、スマホのロック。スマホは今や個人情報の塊であり、友人各所への連絡先や本人の写真、色々なデータ等が詰まっています。ところが本人が掛けていたパスワードが解除できず、情報がいつまでも取り出せなくなる。スマホは、セキュリティ上、安易にパスワードを解除することができない。たとえ相手が家族であっても、第三者がそれを解除することは大きなトラブルの原因となるためです。

他にもこのようなケースがあります。交通事故で夫を亡くした妻に降り掛かった悲劇。夫の死から数日後にFXの会社から電話が入り、亡き夫が持っていたFX取引が2000万円の損失を出したと告げられるということが起こりました。FX会社のロスカットが間に合わず、大きな損害が出てしまい、

その損害額が相続に降り掛かってしまったのです。妻は亡き夫がFX口座を持っていたことを知らず、驚きと失望にかられてしまったそうです。

このように多くのトラブルを引き起こすデジタル遺品ですが、実際はデジタル利用高齢者のうち、対策を打っている人は全体の5%にも満たないようです。現状から想像して欲しいのですが、今突然自分が死んだら、その残した物の全てを家族に見つけてもらうことは可能でしょうか？少なくとも複数持っている銀行口座の情報とその暗証番号をどこか見つけやすいところに保存してあるでしょうか。本人しか知らないものになっていく可能性が高いはず。これらは発見されないものとしてネットの中で残り続ける可能性があります。今後、このような現象が増えていくと考えられ、少しでも早いタイミングで準備を始める必要があると言えるでしょう。



Profile
 東京都大田区生まれ。
 英国ウエールズ大学MBA（経営管理修士）。
 日本交渉学会会員。ハーパード流交渉学・消費者行動心理学・コンフリクトマネジメントを研究。日本コールセンター協会情報調査委員。
 (株)グッドクロス取締役COO
 長年コールセンター運営に携わり、人と人のコミュニケーションについての研究を進めている。思いやりのコールセンターを展開。
 beccall1031642012088
<http://www.beall.jp/>